

条件法現在の動詞形と非現実解釈

非現実解釈を妨げない動詞形

Le conditionnel présent et l'interprétation irréaliste :
Une forme verbale qui n'empêche pas l'interprétation irréaliste

川島 浩一郎

KAWASHIMA KOICHIRO

福岡大学

Université de Fukuoka

E-mail: k-kawa@cis.fukuoka-u.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.43 2017, p.53-71.
原稿受理 2017-12-04 ; 最終版 2017-02-06

抄録

条件法現在の動詞形によって事態の非現実性を表現するためには、その事態が「仮定と帰結」という意味的な枠組みのなかで提示される必要がある。現在時間に位置づけられた事態への言及であることも必要である。つまり条件法現在の動詞形そのものが、非現実の事態を積極的に標示するわけではない。非現実解釈の成立において条件法現在の動詞形が担う役割は「非現実解釈の成立を妨げない」ことにほかならない。

Résumé

Il y a des cas où la présence d'un conditionnel présent peut être considérée comme une marque d'irréalité de l'événement. Cependant, il s'agit d'une simple interprétation. Dans la proposition hypothétique ou dans la proposition consécutive, en effet, il n'existe pas d'opposition entre la réalité et l'irréalité. Le conditionnel présent ne marque donc pas par lui-même une telle irréalité. Dans l'interprétation irréaliste, le rôle du conditionnel présent, quant à lui, est de ne pas empêcher cette interprétation.

キーワード（条件法現在 非現実 モダリティ 過去時制）

© ふらんぼー Flambeau 43 (2017) pp.53-71.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



0. はじめに

条件法現在の動詞形が表す事態が、非現実の事態であることがある。たとえば、非現実の事態として解釈できる (1) の *je serais toi* や *je ferais gaffe ...* には、条件法現在の動詞形が含まれる。同じく非現実の事態として提示されている (2) の *je me méfiera*is にも、条件法現在の動詞形が用いられている。

(1) *Je serais toi je ferais gaffe à moi [...]*. (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.408)

(2) *Remarquez, si j'étais vous je me méfiera*is, [...]. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.209)

(3) *Elle avait assuré qu'elle serait là*. (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.232)

(4) *Il y a des années de cela, il m'a dit que si je le trompais, il ferait tuer mon amant*. (Tonino Benacquista, *La commedia des ratés*, Collection Folio, 1991, pp.212-213)

条件法現在の動詞形が表す事態は、非現実の事態ではないこともある。たとえば、条件法現在の動詞形を含んだ (3) の *elle serait là* は、非現実の事態ではない。同じく条件法現在の動詞形を含んだ (4) の *il ferait tuer mon amant* も、非現実の事態ではない。

条件法現在の動詞形は、それが表す事態が非現実の事態として解釈されるプロセスにおいて、どのような役割を担うのだろうか。(1) から (4) にみられるように、条件法現在の動詞形は「非現実」の事態と非「非現実」の事態の両方に対応することができる。「非現実」の事態としての解釈と非「非現実」の事態としての解釈を両立させるような積極的な表意機能が、条件法現在の動詞形を実現形とする表意単位自体に備わっているのだろうか。あるいは、そうではないのだろうか。

結論の一部を先取りして言えば、非現実解釈の成立において条件法現在の動詞形が担う役割は「非現実解釈の成立を妨げない」ことにほかならない。条件法現在の動詞形そのものが、非現実の事態を積極的に標示するわけではない。本稿では主に、このことを示す。つまり「非現実」の事態としての解釈と非「非現実」の事態としての解釈を両立させる積極的な表意機能が、条件法現在の動詞形を実現形とする表意単位自体に備わっているわけではないことを示す。

1. 事実と概念、用語の確認

1.1. 表意単位と実現形の非「1 対 1」的な対応関係

表意単位とその実現形の間に、1対1の対応関係があるとはかぎらない。声の大きさ、話す速さ、男女差、年齢差、地域差、個人差などなど、音声面でのあらゆる違いに着目すれば、同一の表意単位の実現形は無数に存在することになる。また異音同義や同音異義

の事例も少なくない。たとえば (5) の *il y a* と (6) の *y a* のように、同一の表意単位が異なる実現形をもつことがある。この現象は、異音同義と呼ばれる。また人称代名詞記号素の実現形である (7) の *le* や中性代名詞記号素の実現形である (8) の *le* のように、異なる表意単位が (音声的な微細な違いを除けば) 同じ形で実現することも珍しいことではない。この現象は、同音異義と呼ばれる。

(5) *Il y a quelqu'un ?* (Dennis Etchison, *Rêves de sang*, Collection Le Cabinet noir, 1998, p.263)

(6) *Y a quelqu'un ?* (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.224)

(7) *Ce type, tu le connais ?* (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.326)

(8) *J'avais été traitée comme peu de princesses le sont.* (Amélie Nothomb, *Ni d'Ève ni d'Adam*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.116)

(9) *J'ai envie de me lever et de partir, mais ça ne se fait pas.* (Agnès Abécassis, *Au secours, il veut m'épouser !*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.40)

したがって表意単位と「表意単位の実現形」の対応関係を特定するためには、実現形を決定的な論拠にすることはできない。表意単位とその実現形が、1対1に対応するとはかぎらないからである。たとえば (7) や (8) の *le* が表意単位の実現形だからといって、(9) の *lever* の内部にある *le* が表意単位の実現形であるということにはならない。また (7) や (8) の *le* にみられるように、同一の実現形だからといって同一の表意単位の実現形であるともかぎらない。意味と形の関係は、一意的に定まるとはかぎらないのである。

1.2. 表意単位の実現形であるための必要条件

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、その切片を他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることが必要である。知的意味という用語は、大略、言語共同体において共有される客観的、離散的な弁別にもとづく意味のことを指す。

条件 (a) 発話の一部分において、その切片を他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。

条件 (b) この入れ換えによって、知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる。

つまり発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、少なくとも上の条件 (a) および条件 (b) がみたされることが必要である。たとえば (10) および (11) では、*secret* と *garçon* を入れ換えることができる。つまり *secret* と *garçon* が条件 (a) をみたす。また *secret* と *garçon* の入れ換えによって、(10) や (11) の意味に客観的、離散的な弁別が生じる。つまり *secret* と *garçon* が条件 (b) をみたす。したがって *secret* と *garçon* はそれぞ

れ、少なくとも *c'est un ...* という文脈において、表意単位の実現形であるための必要条件をみたしていると考えてよい。

(10) *C'est un secret.* (Amélie Nothomb, *Métaphysique des tubes*, Le Livre de Poche, 2000, p.48)

(11) *C'est un garçon.* (*Elle*, 30 mai 2005, p.148)

(12) [...], *c'est un garçon bien.* (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.340)

入れ換えの可能性が検証の対象となる切片には、いわゆる「ゼロ切片」も含まれる。ゼロ切片という用語は、切片が不在の状態を指す。たとえば (11) と (12) にみられるように、*c'est un garçon bien* の *bien* はゼロ切片と入れ換えることができる。この入れ換えは (11) と (12) に、知的意味にもとづいた弁別を生じさせる。この観察によって (12) における *bien* は、表意単位の実現形としての必要条件をみたすと考えることができる。

最小の表意単位は、記号素と呼ばれる。記号素は、それ以上小さな表意単位に分割することができない表意単位である。つまり記号素の実現形の内部において条件 (a) と条件 (b) をみたす切片は、その記号素の実現形全体だけである。たとえば (10) の *secret* の内部にあつて条件 (a) と条件 (b) をみたす切片は、この *secret* の全体しかない。よって (10) の *secret* は、記号素 (最小の表意単位) の実現形であるための必要条件をみたすと言ってよい。

ただし、条件 (a) および条件 (b) をみたす発話の切片が表意単位の実現形であるとはかぎらない。たとえば [mwa] における [m] と [nwa] における [n] は、条件 (a) と条件 (b) をみたす。しかし、これらの [m] や [n] を表意単位の実現形と言うことはできない。これらの [m] や [n] は、音素つまり最小の弁別単位の実現形である。したがって、発話のある切片が表意単位の実現形であるためには、少なくとも、その切片が弁別単位の実現形ではないということが前提となる必要がある。

なお表意単位の実現形に相当する切片を、話線から知覚可能な形として切り出すことができるとはかぎらない。たとえば *au* において、前置詞記号素の実現形に相当する切片および定冠詞記号素の実現形に相当する切片は、知覚可能な形としては現れていない。これらの切片が重ね合わさった切片が、*au* という実現形だと言ってよい。

1.3. 半過去の動詞形における過去時制記号素の実現形

半過去の動詞形には、半過去記号素の実現形が含まれる。たとえば *arrivais* という動詞形には、*arrive* には含まれない表意単位の実現形が含まれる。この *arrivais* という動詞形と *arrive* という動詞形が互いに異なるのは、これらの動詞形に含まれる切片 (ゼロ切片でもよい) が異なるからにはかならない。半過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.2.を参照)。すなわち半過去形を特徴づける切片は、(13) の *arrivais* と (14) の *arrive* にみられるように、ほかの切片 (ゼロ切片でも

よい) と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって知的意味にもとづく弁別が発話に生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。半過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである¹。

(13) Je n'arrivais pas à dormir, [...]. (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.109)

(14) Je n'arrive pas à dormir. (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.380)

(15) Le téléphone sonna. C'était Youri. (Amélie Nothomb, *Journal d'hirondelle*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.60)

(16) Mon portable sonne : c'est ma copine Daphné. (Agnès Abécassis, *Au secours, il veut m'épouser !*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.22)

半過去記号素は、無標の過去時制記号素である。いわば純粋な過去時制記号素である。半過去記号素の本質的な表意機能は、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態に、過去性を与えることにほかならない。たとえば半過去の動詞形を用いた (13) の *je n'arrivais pas ...* は「過去の状態」を表現したものとして解釈することができる。一方、現在形の動詞形を用いた (14) の *je n'arrive pas ...* は「現在の状態」を表現したものとして解釈することができる。これらの解釈の間にある相違は、事態の時間的な位置づけが過去時間にあるのか現在時間にあるのかだけである。つまり *je n'arrivais pas ...* における半過去記号素の使用意図は、*je n'arrive pas ...* という事態に過去性を与えることであって、それ以上でも以下でもない。(15) の *c'était Youri* に含まれる半過去記号素の実現形についても同様のことが言える。この *c'était Youri* において半過去記号素を使用した意図は、(16) の *c'est ma copine ...* との対比にみられるように、*c'est Youri* によって表される事態に過去性を与えることであって、それ以上でも以下でもない²。

1.4. 条件法現在の動詞形における過去時制記号素の実現形

条件法現在の動詞形には、単純未来の動詞形には含まれない記号素の実現形が含まれる。たとえば *arriverait* という動詞形には、*arrivera* には含まれない切片 (*ait*) が含まれる。この切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.2.を参照)。すなわち単純未来の動詞形に対して条件法現在の動詞形を特徴づける切片は、(17) の *arriverait* と (18) の *arrivera* にみられるように、ほかの切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって知的意味にもとづく弁別が発話に生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。単純未来の動詞形に対して条件法現在の動

¹ たとえば *vous laviez* [vulavje] の [j] をゼロ切片と入れ換えることによって *vous lavez* [vulave] をえられることから、[vulavje] における半過去記号素の実現形は [j] であると推定することができる。

² 川島浩一郎. 2015 年. 「複合過去形と半過去形の選択にかかわるタスクデザイン — 時制的弁別とアスペクト的弁別 —」. 『福岡大学人文論叢』47-3: 787-812.

詞形を特徴づける最小の切片だからである。

- (17) Il soupira et consulta sa montre, il n'*arriverait* à Iekaterinbourg que dans trois heures. (Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, p.358)
- (18) Ma petite Viviane n'*arrivera* que dans deux semaines. (Thierry Jonquet, *Mon vieux*, Collection Points, 2004, pp.21-22)
- (19) Il ne croyait pas que Lucien *viendrait*. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.158)
- (20) Je ne crois pas qu'il *viendra*, c'est impossible, il travaille... (Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.48)
- (21) [...], il leur a raconté que leur mère est partie mais qu'elle *reviendra*. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.95)

この記号素は、過去時制記号素だと考えられる。その存在が、動詞記号素の実現形を含む発話が表す事態に、過去性を与えうるからである。たとえば (19) の *Lucien viendrait* は「過去を基準時とした未来時間の事態」として解釈することができる。一方 (20) の *il viendra* は「現在を基準時とした未来時間の事態」として解釈することができる。これらの解釈の間には、事態の時間的な位置づけが過去時間にあるのか現在時間にあるかという相違がみられる。実際 (19) において *Lucien viendrait* から過去性を除去した *il ne croyait pas que Lucien viendra* は、たとえば (21) の *elle reviendra* と同様に「現在を基準時とした未来時間の事態」として解釈することが可能である。つまり (19) の *Lucien viendrait* に含まれ、かつ *Lucien viendra* には含まれない切片 (*ait*) には、事態に過去性を与える表意機能があることになる。条件法現在の動詞形には、過去時制記号素の実現形が含まれると言ってよい³。

ただし、条件法現在の動詞形に含まれる過去時制記号素の実現形が、半過去記号素の実現形であるとはかぎらない。半過去記号素もまた、確かに、過去時制記号素である (1.3.を参照)。また条件法現在の動詞形の末尾には、半過去記号素の実現形と同一の切片が現れる。たとえば *je viendrais* や *il viendrait* の末尾の *ais* や *ait* は、*je venais* や *il venait* において半過去の動詞形を特徴づける切片と同一の「かたち」をしている。しかし、表意単位とその実現形は必ずしも1対1に対応するとはかぎらない (1.1.を参照)。条件法現在の動詞形に含まれる過去時制記号素の実現形が半過去記号素の実現形であるのかそうでないのかについては、実現形の「かたち」以外の観察に基づいた考察が必要である⁴。

³ たとえば *vous partiriez* [vupartirje] の [j] をゼロ切片と入れ換えることによって *vous partirez* [vupartire] をえられることから、[vupartirje] における過去時制記号素の実現形は [j] であると推定することができる。

⁴ 川島浩一郎. 2014 年. 「単純未来, 近接未来, 近接過去との共起における半過去と単純過去の対立の中和」. 『福岡大学人文論叢』45-4: 521-541.

1.5. 表意単位がある解釈を妨げる事例と妨げない事例

何らかの表意単位の実現形が、ある特定の解釈を妨げることがある。たとえば (22) の *une enfant* における *une* は、*une enfant* が男性であるという解釈を妨げる。この *une* という実現形は、女性名詞しか限定しないからである。(23) における *cherchais* は、この動詞形が表す事態が現在時間に位置づけられているという解釈を妨げる。(23) の *cherchais* には、過去時制記号素の実現形が含まれるからである (1.3.を参照)。

(22) Mais je ne suis pas *une enfant* ! (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.263)

(23) Ah, vous ! Je vous *cherchais* précisément. (Brigitte Aubert, *Rapports brefs et étranges avec l'ombre d'un ange*, Collection J'ai lu, 2002, p.45)

(24) Autrefois, il a eu un travail, une femme, *un enfant* et une maison. (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.11)

(25) Bonjour, je *cherche* Lucas Shapiro, vous savez où je peux le trouver ? (Maxime Chattam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.206)

(26) Kiki ! Enfin te voilà ! Je te *cherche* partout ! (Jean-Jacques Sempé & René Goscinny, *Le petit Nicolas*, Collection Folio, 1960, p.54)

何らかの表意単位の実現形が、ある特定の解釈を妨げないことがある。たとえば (24) の *un enfant* における *un* は、*un enfant* が男性であるという解釈を妨げない。また、女性であるという解釈も妨げない。(25) における *cherche* は、この動詞形が表す事態が現在時間に位置づけられているという解釈を妨げない。また *cherche* という動詞形は、(26) にみられるように、この動詞形が表す事態が過去時間に位置づけられているという解釈を妨げることもない。

したがって、ある表意単位の実現形がある解釈を妨げないとしても、その表意単位に当該の解釈を生じさせる積極的な表意機能が備わっているとはかぎらない。(24) の *un enfant* が女性であるという解釈が成立するとしても、*un* を実現形とする表意単位が (*une* の場合とは異なり) その解釈に対応する積極的な表意機能を備えているわけではない。(26) の *je te cherche ...* が過去時間に位置づけられた事態であるという解釈が成立するとしても、*cherche* を実現形とする表意単位が (*cherchais* の場合とは異なり) その解釈に対応する積極的な表意機能を備えているわけではない。

1.6. 非現実の仮定と非現実の帰結

ある事態が真の命題として提示されたときに、その事態は文法的に「現実」と呼ばれる。たとえば *il neige* によって表される事態は、それが話者によって真の命題として提示されたときに「現実」と呼ばれる。つまり言語外現実において *il neige* という事態が成立していることと、その事態が文法的に「現実」であることとは別の問題である。

一方、ある事態が偽の命題として提示されたとき、その事態は文法的に「非現実」と呼ばれる。たとえば *il neige* によって表される事態は、それが話者によって偽の命題として提示されたときに「非現実」と呼ばれる。つまり言語外現実において *il neige* という事態が成立していないことと、それが文法的に「非現実」であることとは別の問題である。

事態の真偽が話者によって提示されなければ、その事態は「現実」でもなければ「非現実」でもない。話者による真偽の提示がないかぎり、言語外現実との対応関係は、ある事態が「現実」か「非現実」かの弁別に直接の関係はない。雪が降っていない状況で *il neige* と言ったとしても、話者による真偽の提示がなければ、その *il neige* は「現実」でもなければ「非現実」でもない。話者が嘘をついていることもあれば、間違っていることもあるのである。ある事態が「現実」であるのか「非現実」であるのかは、言語外現実との対応関係の問題というよりも、話者が事態をどのように表現するかの問題である。

(27) *Si j'étais vous, je ne ferais pas ça.* (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.288)

(28) [...], *je me mets à votre place, moi non plus je ne m'aimais pas.* (Frédéric Beigbeder, *Windows on the World*, Collection Folio, 2003, p.62)

(29) *Encore un peu, il me casse le nez pour me remettre les idées en place.* (Sébastien Japrisot, *La dame dans l'auto avec des lunettes et un fusil*, Collection Folio, 1966, p.249)

(30) *Cinq mille ans auparavant, Ray et moi avons peut-être eu plus de choses en commun.* (Christopher Pike, *Sang noir*, Collection J'ai lu, 1999, p.106)

非現実の仮定からは、非現実の帰結しか生じない。ある事態の成立から別の事態が生じるという意味関係において、前者の事態を「仮定」と呼ぶ。後者の事態を「帰結」と呼ぶ。仮定が成立しないのであれば、その仮定の帰結もまた成立しない。つまり仮定が非現実のものであれば、必然的に、その帰結もまた非現実のものでしかありえない。たとえば (27) において *si j'étais vous* が (話者によって偽の事態として提示された) 非現実の仮定であれば、その帰結である *je ne ferais pas ça* もまた (話者によって偽の事態として提示された) 非現実の帰結でしかありえない。(28) において *je me mets à votre place* が (偽の事態として提示された) 非現実の仮定であれば、必然的に、*moi non plus je ne m'aimais pas* もまた (偽の事態として提示された) 非現実の帰結である。(29) において *encore un peu* が (偽の事態として提示された) 非現実の仮定である以上、その帰結としての *il me casse le nez ...* もまた (偽の事態として提示された) 非現実の帰結でしかありえない。(30) において *cinq mille ans auparavant* が非現実の仮定であれば、その帰結としての *Ray et moi avons peut-être eu ...* は、必然的に、非現実の帰結と解釈せざるをえない。

非現実の帰結を表現する文脈で使用される動詞形は、条件法の動詞形とはかぎらない。たとえば (27) の *je ne ferais pas ça* には条件法現在の動詞形が含まれるが、(28) の *je ne m'aimais pas* には半過去の動詞形が含まれる (1.7.と 2.4.を参照)。また (29) の *il me casse le nez ...* には直説法現在の動詞形が含まれており、(30) の *Ray et moi avons*

peut-être eu ...には複合過去の動詞形が含まれる。動詞形が異なるとしても、非現実の仮定から生じる帰結が非現実の事態であることに変わりはない (2.3.を参照)。

1.7. 過去時制記号素と非現実の解釈

過去時制記号素の実現形を含んだ動詞形が表す事態が、非現実の事態として解釈されることがある。(31) においては *si tu n'avait pas trouvé ce type* が非現実の仮定であるかぎり、その帰結である *Damant me descendait* は非現実の事態であると考えざるをえない (1.6.を参照)。この *Damant me descendait* には、過去時制記号素の実現形が含まれる (1.3.を参照)。同様に (32) の *trois millimètres à côté* が非現実の仮定であるかぎり、その帰結である *je perdais mon œil* を現実の事態であると考えすることはできない。この *je perdais mon œil* には、過去時制記号素の実現形が含まれる。

(31) *Si tu n'avait pas trouvé ce type, Damant me descendait.* (Delacorta, *Lola*, Collection Le Livre de Poche, 1985, p.123)

(32) *Un éclat d'obus en Irak dans le « triangle de la mort ». Trois millimètres à côté, et je perdais mon œil...* (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.385)

(33) *Encore un peu et il se perforait la boîte crânienne.* (Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.352)

(34) *Le soleil descendait lentement, [...].* (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.228)

したがって、ある種の過去時制記号素の実現形の存在は、少なくとも、非現実の事態としての解釈を妨げないと考えてよい⁵。たとえば (33) において *encore un peu* が非現実の仮定であるかぎり、その帰結である *il se perforait*に含まれる過去時制記号素の実現形の存在は、この帰結を非現実の事態として解釈する妨げにはならない。実際 (33) の *il se perforait*は、非現実の事態として解釈することができる⁶。むしろ、非現実の仮定から生じる帰結であるため、そのように解釈せざるをえないと言ってもよい。

ただし、ある種の過去時制記号素の実現形が非現実解釈を妨げないとしても、その過去時制記号素に、非現実解釈を生じさせる積極的な表意機能が備わっているとはかぎらない。つまり当該の過去時制記号素は、現実の事態と非現実の事態を弁別しない表意単位なのかもしれない (1.5 を参照)。実際、たとえば (過去時制記号素の実現形を含んだ) *descendait* という動詞形が表す事態は、(31) の *Damant me descendait* のように非現実の事態であることもあれば、(34) の *le soleil descendait ...*のように現実の事態であることもある。

⁵ 川島浩一郎. 2012 年. 「過去時制と非現実解釈」. 『ふらんばー』37: 17-35.

⁶ 川島浩一郎. 2013 年. 「半過去と非現実の帰結 — 間一髪半過去のめぐって —」. 『福岡大学研究部論集』A13-1: 25-31.

2. 条件法現在の動詞形における非現実解釈

2.1. 言及する時間領域（過去時間、未来時間、現在時間）による解釈の相違

2.1.1. 条件法現在の動詞形による過去の時間領域への言及

条件法現在の動詞形を用いて、過去時間に位置づけられた事態に言及することがある。たとえば (35) の *il attendrait ...* や (36) の *elle ne s'en tirerait pas* は、過去時間に位置づけられた事態への言及である。(37) の *Adamsberg lui répondrait* もまた、過去時間に位置づけられていると言ってよい。(37) の発話の全体が、過去時間に属する事態への言及だからである。(38) にみられる *il saurait ...* や *elle prendrait un avion, elle viendrait me rejoindre* についても同様である。

(35) La journée ne faisait que commencer. *S'il ne pouvait pas aller vers la vérité, il attendrait que la vérité vienne à lui.* (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.327)

(36) Elle sentait confusément que *si elle ne pouvait pas en elle-même une force nouvelle et indispensable*, elle ne s'en tirerait pas. (Dean Ray Koontz, *Miroirs de sang*, Collection Pocket, 1977, p.166)

(37) Il savait très bien ce qu'Adamsberg lui *répondrait*. (Fred Vargas, *Coule la Seine*, Collection J'ai lu, 2002, p.96)

(38) Elle m'a dit que Michel Caravaille rentrait à l'hôtel d'une minute à l'autre, qu'il *saurait* ce qu'il fallait faire, qu'ils allaient me rappeler. Elle *prendrait* un avion, elle *viendrait* me rejoindre. (Sébastien Japrisot, *La dame dans l'auto avec des lunettes et un fusil*, Collection Folio, 1966, p.243)

条件法現在の動詞形を用いて過去時間に位置づけられた事態に言及するとき、非現実の仮定から生じる帰結でないかぎり、そこに非現実解釈は生じない。たとえば (35) の *il attendrait ...* や (36) の *elle ne s'en tirerait pas* を、非現実の事態として解釈することはできない。(35) の *s'il ne pouvait pas aller ...* も (36) の *si elle ne pouvait pas ...* も、非現実の仮定ではないからである (2.2.を参照)。また (37) の *Adamsberg lui répondrait* を、非現実の事態として解釈することもできない。(38) における *il saurait ...* や *elle prendrait un avion, elle viendrait me rejoindre* についても同様である。これらの事態は、非現実の仮定から生じる帰結ではない。

(39) Si Adamsberg avait été Émile en cet instant, il *aurait brisé* la tête de Danglard sur-le-champ. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.150)

(40) Elle *aurait été* moche, personne ne se *serait soucié* d'elle. (Amélie Nothomb,

なお、過去時間に位置づけられた非現実の事態は、条件法過去の動詞形を用いて表現することが規範である。たとえば (39) の *il aurait brisé ...* には、条件法過去の動詞形が含まれる。また (40) の *elle aurait été moche* や *personne ne se serait soucié ...* にも、条件法過去の動詞形が含まれる。

2.1.2. 条件法現在の動詞形による未来の時間領域への言及

条件法現在の動詞形を用いて、未来時間に位置づけられた事態に言及することがある。たとえば (41) の *tu serais triste* や (42) の *ça te plairait* は、それぞれの文脈（例文の出典）において、未来時間に位置づけられた事態への言及として使用されている。同じく (43) の *chacun apporterait ...* や (44) の *elle me donnerait ...* もまた、未来時間に位置づけられた事態だと言ってよい。

(41) Mais, Papa, *tu serais* triste si tu la voyais plus, maman, dis ? (Alix Girod-de l'Ain, *De l'autre côté du lit*, Collection J'ai lu, 2003, p.240)

(42) [...], si tu devenais maire du village plus tard, *ça te plairait* ? (Marc Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.64)

(43) Demain, chacun *apporterait* son bagage. (Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.26)

(44) J'aimerais être avec Charlotte, juste ce soir. Elle *me donnerait* le mouchoir dans lequel elle ne pleure jamais pour éponger le sang. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.365)

条件法現在の動詞形を用いて未来時間に位置づけられた事態に言及するとき、そこに非現実解釈は生じない。未来時間に位置づけられた事態には、現実と非現実の弁別がない。まだ生じていない事態については、それを現実の事態と言うことも、それを非現実の事態と言うこともできないからである⁷。たとえば (41) の *tu serais triste* や (42) の *ça te plairait* を、非現実の事態として解釈することはできない。これらは、発話時点ではまだ生じていない事態だからである。同様に (43) の *chacun apporterait ...* や (44) の *elle me donnerait ...* を、非現実の事態として解釈することもできない。これらの事態は、未来時間に位置づけられているからである。

2.1.3. 条件法現在の動詞形による現在の時間領域への言及

⁷ 条件法現在の動詞形を用いて未来時間に位置づけられた事態に言及するとき、当該の事態が成立する「可能性の低さ」などのモダリティを表現することができる。ただし「成立する可能性が低い事態」と「非現実の事態」を同一視することはできない。

条件法現在の動詞形を用いて、現在時間に位置づけられた事態に言及することがある。たとえば (45) の *je retomberais ...* や (46) の *il aurait au moins soixante ans* は、現在時間に位置づけられた事態への言及である。同じく (47) の *l'équipe dormirait déjà* や (48) の *je tuerais les gens* もまた、現在時間に位置づけられた事態だと言ってよい。

(45) Si j'étais la jeune fille romantique que tu as connue, je *retomberais* instantanément amoureuse de toi. (Thierry Breton & Denis Beneich, *Softwar*, Collection Le Livre de Poche, 1984, p.275)

(46) Il *aurait* au moins soixante ans, s'il était encore en vie ! (Dean Ray Koontz, *Miroirs de sang*, Collection Pocket, 1977, p.136)

(47) Nous vivons au rythme du soleil, en temps normal l'équipe *dormirait déjà*. (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.295)

(48) Je tue pas les bêtes, alors pourquoi je *tuerais* les gens ? (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.88)

条件法現在の動詞形を用いて現在時間に位置づけられた事態に言及するとき、そこには非現実の事態としての解釈が生じる可能性がある。実際 (45) の *je retomberais ...* や (46) の *il aurait au moins soixante ans* は、非現実の事態として解釈することができる。これらは非現実の仮定から生じる帰結であるため、むしろ非現実の事態として解釈せざるをえない (1.6.を参照)。また (47) の *l'équipe dormirait déjà* や (48) の *je tuerais les gens* についても同様である。これらは、非現実の事態として解釈せざるをえない事態である。

2.2. 非現実の仮定と非現実の帰結という枠組みの必要性

2.2.1. 条件法現在の動詞形と非現実の仮定

条件法現在の動詞形によって表現された事態を、非現実の仮定として解釈できることがある。たとえば (49) の *je serais toi* は、非現実の仮定としての解釈が可能である。同様に (50) の *je serais vous* も、非現実の仮定として解釈することができる。

(49) Je *serais* toi, je ne me *bilerais* pas trop cependant. (Fred Vargas, *Pars vite et reviens tard*, Collection J'ai lu, 2001, p.118)

(50) Cela dit, je *serais* vous, je n'*abandonnerais* pas, on ne sait jamais. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.410)

(51) Vous *auriez* cent ans, je vous *dirais* : [...]. (Sébastien Japrisot, *Piège pour Cendrillon*, Collection Folio, 1965, p.25)

条件法現在の動詞形によって表現された事態を非現実の仮定として解釈するためには、当該の事態が非現実の仮定であるという前提が必要である。たとえば (50) におい

て *je serais vous* が非現実の仮定として解釈されるためには、*je n'abandonnerais pas* という帰結の存在が必要である。また当該の事態が、*je serais vous* のように、非現実の事態であることが（話者と対話者にとって）自明であるような事態であることが望ましい。

一方、未来時間に位置づけられた事態には、非現実の仮定としての解釈は生じない。そこには、現実と非現実の弁別がないからである（2.1.2.を参照）。たとえば（51）の *vous auriez cent ans* は、それが現在時間に位置づけられた事態でないかぎり、非現実の仮定として解釈することはできない。実際（51）の *vous auriez cent ans* は、それが使用された文脈（例文の出典）において、未来時間に位置づけられた事態として提示されている。よって非現実の仮定としての解釈は生じない。

2.2.2. 条件法現在の動詞形と非現実の帰結

条件法現在の動詞形によって表された事態が、非現実の仮定から生じる帰結として提示されることがある。たとえば（52）の *je te trouverais bizarre...* は、*si j'étais pas ton ami* という非現実の仮定から生じる帰結として提示されている。同様に（53）の *je serais mieux* は、*à l'hôtel* という非現実の仮定から生じる帰結として提示されている。

（52） *Si j'étais pas ton ami... eh bien... je te trouverais bizarre...* (Patrice Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.59)

（53） *Je serais mieux à l'hôtel !* (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Terminus*, Collection Folio, 1980, p.95)

条件法現在の動詞形によって表現された事態が非現実の仮定から生じる帰結である場合、その事態は必然的に、非現実の事態として解釈される。非現実の仮定からは、非現実の帰結しか生じないからである（1.6.を参照）。たとえば（52）の *je te trouverais bizarre...* を非現実の事態として解釈してよいのは、それが *si j'étais pas ton ami* という非現実の仮定の帰結として提示されているからである。（53）の *je serais mieux* を非現実の事態として解釈できるのは、*à l'hôtel* が非現実の仮定であるからにほかならない。

2.2.3. 非現実の仮定でも非現実の帰結でもない場合の条件法現在の動詞形

条件法の動詞形が表す事態が、非現実の仮定もなければ、非現実の仮定から生じる帰結でもないことがある。たとえば（54）の *il quitterait ...* や（55）の *tu n'aurais pas ...* を帰結とする仮定は、非現実の仮定ではない。（56）の *on viendrait ...* や（57）の *... le déposerait à Berlin*、（58）の *tu ferais* は仮定でもなければ、仮定から生じる帰結でもない。

（54） *Chavane pensa que si Lucienne mourait il quitterait son emploi ; [...]*. (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Terminus*, Collection Folio, 1980, p.202)

- (55) Si je te quittais, tu n'aurais pas une larme. (Nicole de Buron, *Qui c'est, ce garçon ?*, Collection J'ai lu, 1985, p.106)
- (56) Il haussa les épaules comme un enfant qu'on viendrait d'engueuler. (Guillaume Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.235)
- (57) Le lendemain, il remontait dans l'avion qui, via New York, le déposerait à Berlin. (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.30)
- (58) C'est fini : elle ne reviendra pas. Elle a tourné la page et tu ferais bien d'en faire autant. (Guillaume Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.40)

このように、条件法現在の動詞形によって表現された事態が非現実の仮定でもなければ、非現実の仮定から生じる帰結でもない場合、そこに非現実解釈は生じない。たとえば (54) の *il quitterait ...* や (55) の *tu n'aurais pas ...* を、非現実の事態として解釈することはできない。これらが、非現実の仮定から生じる帰結ではないからである (2.1.1.と2.1.2.を参照)。同様に (56) の *on viendrait ...*、(57) の *... le déposerait à Berlin* そして (58) の *tu ferais ...* を、非現実の事態として解釈することはできない。これらは仮定でもなければ、仮定から生じる帰結でもないからである。

2.2.4. 仮定と帰結という枠組みと非現実解釈

条件法現在の動詞形によって表現された事態が非現実の仮定として提示されるか、あるいは非現実の仮定から生じる帰結として提示される場合に、その事態を非現実の事態として解釈することができる。たとえば (59) の *je serais toi* が非現実の事態として解釈されるのは、この事態が非現実の仮定として提示されるからである (2.2.1.を参照)。また (60) の *je n'accepterais pas* を非現実の事態として解釈してよいのは、この事態が *à votre place* という非現実の仮定から生じる帰結だからにほかならない。(61) において *sans toi* が非現実の仮定であるかぎり、その帰結である *je mourrais* や *ma vie serait finie* は、現実の事態として解釈することはできない (2.2.2.を参照)。

- (59) Je serais toi, je ne toucherais pas à l'arme avant de m'avoir écouté. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.185)
- (60) À votre place, je n'accepterais pas. (Georges Simenon, *Le Petit Saint*, Collection Le Livre de Poche, 1964, p.199)
- (61) Sans toi, je mourrais. Ma vie serait finie. (Dean Ray Koontz, *Miroirs de sang*, Collection Pocket, 1977, p.150)
- (62) Oh bien sûr, il y aurait une solution... (Philippe Djian, *37 °2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.125)
- (63) Ne fais rien. Tout le monde le saurait, on se moquerait de nous. (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.169)

条件法現在の動詞形によって表現された事態が、非現実の仮定もなければ、非現実の仮定から生じる帰結でもない場合、そこに非現実解釈は生じない。たとえば (62) の *il y aurait une solution* は、非現実の事態として解釈することはできない。この事態が非現実の仮定もなければ、非現実の仮定から生じる帰結でもないからである (2.2.3.を参照)。また (63) における *tout le monde le saurait* も *on se moquerait de nous* も、非現実の事態として解釈することはできない。これらは未来時間に位置づけられた事態だからである。未来時間に位置づけられた事態には、現実と非現実の弁別がない (2.1.2.を参照)。まだ生じていない事態については、それを現実の事態と言うことも、それを非現実の事態と言うこともできない。

したがって、条件法現在の動詞形によって表現された事態が非現実の事態として解釈されるためには、それが、仮定と帰結という意味的な枠組みにおいて使用されることが、いわば必要十分条件となる。非現実の仮定からは、非現実の帰結しか生じない (1.6.を参照)。そして、非現実の仮定から生じる帰結であれば、その事態は必然的に非現実の事態としてしか解釈ができない。

2.3. 非現実解釈を妨げない条件法現在の動詞形

条件法現在の動詞形によって表現された事態が非現実の事態として解釈されるためには、すでに述べたように、その動詞形が仮定と帰結という意味的な枠組みにおいて使用されることが必要である。実際 (64) の *je serais vous* が非現実の事態として解釈されるのは、この事態が非現実の仮定として提示されているからである (2.2.1.と 2.2.4.を参照)。また (64) の *j'évitais* や (65) の *la France serait ...* が非現実の事態として解釈されるのは、これらが、非現実の仮定 (*je serais vous* や *sans les Français*) から生じる帰結として提示されているからである (2.2.2.と 2.2.4.を参照)。

(64) *Je serais vous, j'évitais, [...]*. (Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.427)

(65) *Je suis d'accord avec les Américains : la France serait tellement mieux sans les Français !* (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.266)

条件法現在の動詞形によって表現された事態が非現実の事態として解釈されるためには、その動詞形が、現在時間に位置づけられた事態への言及であることも必要である。たとえば (64) の *je serais vous* や *j'évitais* は、現在時間に位置づけられた事態である (2.1.3.を参照)。(65) の *la France serait ...* という事態も、現在時間に位置づけられている。

以上の観察から、条件法現在の動詞形そのものが、非現実の事態を積極的に標示するわけではないと言うことができる。条件法現在の動詞形が非現実の仮定として解釈されるためには、そもそも、その動詞形が表す事態が、非現実の仮定として提示される必要がある。条件法現在の動詞形が非現実の帰結として解釈されるのは、それが非現実の仮定から生じる帰結として提示されるからにはほかならない。これらの仮定や帰結が、現在時間

に位置づけられることも必要である (2.1.1.と 2.1.2.を参照)。

(66) *Si je suis eau, quel sens cela a-t-il de te dire oui, je vais t'épouser ? Là serait le mensonge. On ne retient pas l'eau.* (Amélie Nothomb, *Ni d'Ève ni d'Adam*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.159)

(67) *Toute poire que je suis, je lui ai volé dessus, je lui ai arraché une poignet de cheveux. Si Tony ne s'interpose pas, je la laisse chauve.* (Sébastien Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.120)

(68) *Encore un peu, je faisais sauter tout le quartier.* (Sébastien Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.150)

(69) *Un peu plus, [...], je m'endormais... J'ai encore sommeil...* (Pierre Boileau & Thomas Narcejac, *Sueurs froides*, Collection Folio, 1958, p.163)

非現実の仮定から生じる帰結においては、条件法現在の動詞形が事態の非現実性を積極的に表現する必要はない。非現実の仮定からは、非現実の帰結しか生じない。よって非現実の仮定から帰結が生じてさえいれば、その帰結が非現実の事態であることは自明である。実際 (66) から (69) にみられるように、帰結の非現実性を表現するために、条件法の動詞形が使用されるとはかぎらない (1.6.を参照)。

したがって、非現実解釈の成立において条件法現在の動詞形が担う役割は「非現実解釈の成立を妨げないこと」にはかならない。条件法現在の動詞形は、それが様々なモダリティ (婉曲、推測、伝聞、可能性など) を表現できるようにしても、事態が非現実であることを積極的に標示するわけではない。非現実解釈を成立させる積極的な表意機能を備えているわけでもない (1.5.を参照)。それにもかかわらず、条件法現在の動詞形は、非現実の事態の表現に対応することができる。よって、非現実の事態を表現する文脈において条件法現在の動詞形を用いることができるのは、それが「非現実解釈の成立を妨げない」表意単位の実現形だからだと考えざるをえない⁸。

2.4. 非現実解釈における過去時制記号素

条件法現在の動詞形には、過去時制記号素の実現形が含まれる。たとえば (70) における *arriverait* という動詞形には、(71) の *arrivera* には含まれない切片が含まれる。この切片は、過去時制記号素の実現形だと言ってよい (1.4.を参照)。

(70) *Elle savait maintenant que jamais ça n'arriverait.* (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.139)

(71) *Mais, de toute façon, ça arrivera.* (*Elle*, 4 avril 2005, p.87)

(72) *Encore dix minutes et il savait tout du couple Andrieu.* (Brigitte Aubert,

⁸ 歴史的には、接続法半過去形の衰退と関係がある。現代フランス語では、非現実の表現の一部を条件法に無理やり押しつけた格好になっている。

Funérarium, Collection Points, 2002, p.153)

(73) Un peu plus, et j'*allais me mettre* à l'imaginer en sous-vêtements. (Agnès Abécassis, *Toubib or not toubib*, Collection Le Livre de Poche, 2008, p.82)

ある種の過去時制記号素の実現形の存在は、少なくとも、非現実の事態としての解釈を妨げないと考えてよい。たとえば (72) において *encore dix minutes* が非現実の仮定であるかぎり、その帰結である *il savait* に含まれる過去時制記号素の実現形の存在は、この帰結を非現実の事態として解釈する妨げにはならない (1.7.を参照)。同様に (73) の *un peu plus* が非現実の仮定であれば、その帰結である *j'allais me mettre ...* に含まれる過去時制記号素の実現形は、この帰結を非現実の事態として解釈する妨げにはならない (1.5.を参照)。

(74) Je *serais* aussi jolie qu'elle si j'*étais* habillée pareil. (Sébastien Japrisot, *Piège pour Cendrillon*, Collection Folio, 1965, p.102)

(75) Tu es plutôt bel homme, j'*aurais* trente ans de moins je te *ferais* des avances. (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.37)

したがって条件法現在の動詞形が非現実解釈の妨げにならないことには、そこに過去時制記号素の実現形が含まれていることが関与していると推論することができる。条件法現在の動詞形は、少なくとも非現実解釈を妨げない (2.3.を参照)。たとえば (74) の *je serais aussi jolie* において条件法現在の動詞形が非現実解釈の妨げとならないのは、そこに過去時制記号素の実現形が含まれているからだと推論することができる。また (75) における *j'aurais trente ans de moins* や *je te ferais des avances* についても、同様の推論が成り立つ。

3. おわりに

条件法現在の動詞形によって事態の非現実性を表現するためには、その事態が「仮定と帰結」という意味的な枠組みのなかで提示される必要がある。たとえば (76) の *je serais toi* が非現実の事態として解釈されるのは、それが非現実の仮定として提示されているからである。(77) の *je serais pas féministe* が非現実の事態として解釈されるのは、それが非現実の仮定 (*si j'étais Brigitte Bardot*) から生じる帰結として提示されているからにほかならない。

(76) Je *serais* toi, je commencerais à chercher un taxi. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.593)

(77) *Si j'étais Brigitte Bardot*, peut-être que je *serais* pas féministe ! (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.23)

条件法現在の動詞形によって事態の非現実性を表現するためには、その事態が、現在時間に位置づけられることも必要である。実際 (76) の *je serais toi* は、現在時間に位置づけられた事態である。(77) の *je serais pas féministe* という事態も、現在時間に位置づけられている。条件法現在の動詞形によって表現される事態が過去時間や未来時間に位置づけられる場合、そこに非現実の事態としての解釈は生じない。

以上の観察事実から、条件法現在の動詞形そのものが、非現実の事態を積極的に標示するわけではないと考えられる。とくに非現実の仮定から生じる帰結においては、条件法現在の動詞形が事態の非現実性を積極的に表現する必要はない。非現実の仮定からは、非現実の帰結しか生じないからである。

つまり、非現実解釈の成立において条件法現在の動詞形が担う役割は「非現実解釈の成立を妨げない」ことにほかならない。条件法現在の動詞形は、それによって様々なモダリティ (婉曲、推測、伝聞、可能性など) を表現できるにしても、非現実解釈を成立させる積極的な表意機能をそれ自体には備えていない。それにもかかわらず、条件法現在の動詞形は、非現実の事態の表現に対応することが可能である。このことから、非現実の事態を表現する文脈において条件法現在の動詞形を用いることができるのは、それが「非現実解釈の成立を妨げない」表意単位の実現形だからだと考えざるをえない。

したがって条件法の動詞形の表意機能に、非現実解釈を成立させる積極的な要因を探しても、正解はえられない。条件法現在の動詞形が非現実の事態を表す文脈で用いられるのは、それが「非現実解釈の成立を妨げない」からでしかない。条件法現在の動詞形は、事態を非現実なものとして提示する積極的な表意機能を備えていない。また、事態を非「非現実」なものとして表現する積極的な表意機能も備えていない。実際、条件法現在の動詞形が表現する事態は、非現実の事態であることもあれば、非「非現実」の事態であることもある。条件法現在の動詞形は、いわば「現実の事態」と「非現実の事態」を区別しない動詞形であると言ってよい。

より正しい問題設定は、条件法現在の動詞形はなぜ非現実解釈を妨げないのかということではないだろうか。少なくとも、この問題設定を出発点にするほうが効率的である。そうでなければ「現実の事態」と「非現実の事態」を両立させるような積極的な表意機能の存在を想定することが、分析の出発点になってしまう。これは非常に難しいはずである。

(78) *Un peu plus et je le laissais filer, [...].* (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.115)

条件法現在の動詞形が非現実解釈を妨げないの理由の一つは、条件法現在の動詞形に過去時制記号素の実現形が含まれていることだと思われる。過去時制記号素の実現形は、(78) の *je le laissais filer* にみられるように、非現実解釈を妨げないからである。実際 (78) の *je le laissais filer* には、過去時制記号素の実現形が含まれる。

参考文献

- 川島浩一郎. 2012年. 「過去時制と非現実解釈」. 『ふらんぼー』37: 17-35.
- 川島浩一郎. 2013年. 「半過去と非現実の帰結 — 間一髪の半過去をめぐって —」. 『福岡大学研究部論集』A13-1: 25-31.
- 川島浩一郎. 2014年. 「単純未来, 近接未来, 近接過去との共起における半過去と単純過去の対立の中和」. 『福岡大学人文論叢』45-4: 521-541.
- 川島浩一郎. 2015年. 「仮定を提示するSi節における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和 — 半過去記号素と原過去時制記号素 —」. 『福岡大学人文論叢』47-2: 497-519.
- 川島浩一郎. 2015年. 「複合過去形と半過去形の選択にかかわるタスクデザイン — 時制的弁別とアスペクト的弁別 —」. 『福岡大学人文論叢』47-3: 787-812.
- 川島浩一郎. 2017年. 「仮定を表すSi節における過去時制記号素」. 『福岡大学人文論叢』48-4: 1127-1144.